

# 大地

第 40 号  
2012. 6. 20. 発行  
浄 國 寺  
上越市阿3丁目14-10  
☎025-523-5724

## 浄土真宗は難しい

山崎隆昌

親しい友と酒を飲みながらの語らひは最高にぜい沢である。楽しく満ち足りた豊かな時間がゆったりと流れている感じ。

とは言うものの、飲んでいるのは私のみで、相手は一杯の生ビールをゆっくりチビリチビリ。美味そうにニコニコされながら飲まれる。それでも、顔にはほんのりと赤みがさして、まるで大酒を飲まれたよう。

話の相手は、友と呼ぶには失礼で、年齢が私より十五歳も年長、博学、多才の人、しかも人生の機微を心得た大先達である。

話題は、高田の町のこと、焼物のこと、食べ物のこと、絵の事、歌や俳句のこと、山川のことなど、思いつくままに、あの話、この話を取りとめも無く続けられた。

やがて仏教についての話になり、幾つかのやり取りのあとで、次のように述べられた。

「浄土真宗は難しいですね。自分のなかで理解したことを積み重ね、積み重ねて考えていくのだが、最後になると南無阿弥陀仏とただ念仏になる。そのところが難しく解らないですね。禅宗のように論理的にはいかないですね」

「そうです。私もそのように思います」

言われた私は思わず、同感し、うなずいてしまった。それでも何か言わねばと思い曾我量深先生が「南無阿弥陀仏と念じ称える人の直前に仏は居られる」と明確に述べられていることをお話しした。けれども、それは借り物で自分の答えにはなっていない。

相手に答えながら、そのときの私の中では、日ごろの自らの言動をそこに重ね、他力念仏の教えに素直にうなずくことができず困惑している自分の姿を見るのである。

私は浄土真宗の寺に生を受けたご縁で、親鸞聖人の教えに出遇うことができたのであるが、純粹に信心を喜ぶ自分がそこにはない。

カラッポの頭のなかで、あれこれと理屈をこね回し、解釈しているにすぎないのだ。

服部之総は、敗戦直前に獄死した哲学者三木清の未定稿『親鸞』を論じた『親鸞ノート』の中で「親鸞は当年の世界人的知識の域に立ちながら素朴な農民と安心を同一しえたのに対して、三木は親鸞を哲学的に解釈しただけ

で、親鸞と信仰を共にすることはゆるされな  
い」と、哲学（科学）的真理から宗教的真理  
を見ることの絶望的な難しさを述べているが、  
現代人の「もの知り解釈」に対する鋭い指摘  
であると思う。

吉野秀雄著『良寛和尚の人と歌』を見ると  
南無阿弥陀仏と念仏する良寛和尚の歌が、い  
くつか載せられてある。たとえば次の二首

◇我ながら嬉しくもあるか弥陀仏の

いますみ国に行くと思へば

◇草の庵に寝てもさめても申すこと

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

吉野秀雄は、同著のなかで「良寛に他力本願の歌の少なくないことから、晩年に及んで浄土宗または浄土真宗に改宗したのだといふ人もあるが、甚しい愚説である」と厳しく述べている

良寛和尚は曹洞禅の悟達者である。しかし融通無碍、心に感じ、心に響くままに応じるまるで純真な子どものよう。

さて、お酒も十分いただいた。料理も美味でしたなあ。この話の続きは、この後も途切れる事なく一生かかることだろう。

今は、友との心地よい語らひを枕に、眠りにつくでしょう。

## オランダとカナダの思い出

山形県 遊佐町 入江伸幸

一九七〇年五月（昭和四十五年）公務員を辞し、イスラエルの集団農場（キブツ）での体験実習に赴きました。その時の挨拶文には「小生この度イスラエルの集団農場に行き研鑽する事を決意しました。キブツでの共同生活をおして人間の温かい連帯感を身に付けたく、さらに民族闘争の渦中直面している異民族、特にイスラエル人が平和と自由を如何に求めているかを現地青年と語り合いたく、又広い視野に立っての、日本農業の根底からの解決の為の探求と、その技術習得を志しています……」（小生酪農学を大学で専攻）

その後イスラエルからヨーロッパに向かい、キブツ時代のオランダの友人の父親の計らいで、一九七三年夏一月ほどオランダの干拓地（ポルダー）の酪農家で実習をしました。

このIJFF（アイフ）農場は国のモデル農場であり、搾乳牛七〇頭規模の当時の先端技術農場でした。モダンな牛舎、最先端の搾乳室、大型酪農機械を見るにつけ、自分の運の良さに小躍りしました。三〇代の若い夫婦とお手伝い一名、男児のピート九歳、女兒のアダ七歳とエイデット二歳、そして極東からの男児の七名。私の英語とドイツ語で人形み

たいに可愛い子供達とのオランダ語との対話、良い人たちとの楽しい生活は矢の如く過ぎ去りました。

二〇〇九年五月、別のオランダ人からの招待を受け、再度オランダの地を訪れました。もう一度、あの青春のひと時に汗を流した大地に立ってみたいという願望強く、友人に彼らの消息の調査をお願いする。が電話も無く手掛かり無し。悪く考え事故か？倒産か？子供が経営を継がなかったのかと心配し、とに角その地に行ってみると、アイフ氏は家族でカナダに移住し、二五〇頭の搾乳牛を飼っているとか！

帰国後すぐに規模拡大の賞賛の手紙を書き出来得るならば農場のある、アルバータ州のイニスフェイル（カルガリーの北一二〇キロ）を訪れてみたいと伝えました。返事の手紙には、十五年前に生産規模拡大のため息子夫婦共々移住し、三〇〇頭の搾乳牛と二五〇頭の後継牛、それになんと四百町歩の飼料作物を栽培しているといえます。カナダは美しい国チャンスがあれば歓迎するからおいで！とききた。

これで行かない理由はない！よし行くぞ。三十八年ぶりだ！と決心。二〇一一年九月に機上の人となり、カルガリー空港でアイフと再会後、家でアイフ夫人とも再会！思い起こせば一九七三年実習も終わりのよいよお別

れという時、夫人が突然オンオンとまるで子供のように泣き出してしまった。辛い別れたのか？しかも夫と三人の子供の前である。私は何も言えず、出来ず、すこすことその場を去りました。

そんな事もあり夫人との再会のハグ（挨拶の抱擁）は、日本人離れの大袈裟なものとなりました。アイフ氏酪農歴史は、二十三歳で十五頭と九町歩の草地で始め、一九七二年の入植で七〇頭の搾乳牛に拡張しました。この時、国の十一戸の入植者受け入れの枠に対し応募者二〇〇〇戸だったとか。一九七三年、紹介者のバウド氏が、アイフ氏は優秀な酪農家と言っていたのを思い出しました。

息子のピートは馬術で知り合ったジャクリンと結婚、息子三人。「なぜ酪農を継いだの？」私の質問に、農学校の酪農に就職させる指導が上手かったのだからと答えた。娘のアダから突然メールがきて、当時少女だった私を覚えていて？私たち息子三人いる。大震災の後も心配のメールをくれた。下の娘エイデットとはオランダからの電話でお話しました。自分は貴方を覚えていないけど貴方のごとは両親からよく聞いていますよ。だって。

アイフさんの孫たちとも楽しく語り合う事が出来ました。日本の経済がどんどん成長し、日本の畜産物消費が多くなるという見通しのたもと畜産学を専攻し故郷庄内の地域振興のた

め、畜産指導者として尽力したいという熱い思いも現実の厳しさに潰されてしまいました。アイフ農場の大成功の裏腹に日本の畜産の大部分の消滅の現実を見せつけられたのも辛い事実です。T P P もやっています。日本の畜産よ がんばれ！

## 救急車

山崎 慎子

街を歩いていて突然、救急車の音が耳にとびこんで来ることがある。あるいは眠りにつこうとしている布団の中で、遠くからピーポーピーポーと聞こえてくることがある。条件反射のように義母を思い出し、次いで救急隊の人達への感謝の思いが湧き上がってくる。

母は晩年、よく救急車のお世話になった。その多くは腸閉塞によるものだった。昭和五十四年に大量の吐血のため病院に運びこまれた母は、胃潰瘍の緊急手術を受け、胃のほぼ半分を摘出したのである。その後、腸閉塞をおこし易くなってしまったのだ。

用心深くなった母は、よく嘔む習慣が身につくとき野菜をより多く食べ、便通にも人一倍気をつかう生活であったのに、まさに忘れた頃に腸閉塞の症状が母を襲った。しかし緊急入

院になってもその都度、手当が功を奏して症状は治まり一週間程で帰宅するということが繰り返された。

そのうち私達も慣れっこになってしまい、ある時などオオカミ少年よろしく「あゝ、どうせまた大したことないに違いない」と高をくくったことがあった。

まことに人の痛みは他人には伝わりにくい。数度にわたる腸閉塞騒動は、私達の感覚を次第にマヒさせていったのである。

母は本来、かなり我慢強い人で、その母親をして「お前の痛い苦しいはギリギリのところに来て言うから、いつもひどくなって困ったものだ」と言わしめたという。そんな母も寝つくようになってからは弱気になり、あちこち不快を訴えるようになった。

ある時母が、顔をしかめて痛い、苦しいと訴える。こちらは勝手に腸閉塞を恐れるあまりの不安感なんだろうと決めつけて、あまりとりあわずに様子を見ていた。

ところが痛みは次第に強くなって行く様子。結局また救急に運びこむことになる。救急車をお願いし「あのー、サイレンを止めて来て頂くことはできませんか」「それだと緊急車両と認められないのですよ。でもまあ、近くに行ったらなるべく止めるようにしましょう。そんなやりとりをしたこともあった。救急車も初めの頃は、極めて非日常的経験なので

どうしても緊張してしまい、母の年齢を尋ねられているのに自分の年を答えたり、病院までの道のりがとても遠く感じられたものだ。

回を重ねる毎に要領を覚え、車の中の様子隊員の人達の処置なども、頼もしく感じながら見ていることができるようになった。ただただ有難く、心底頭の下がる思いを味わいつつ、病院に搬送し手続きを終えて帰って行かれる救急車を見送ったものである。

昨年二月十七日夕刻、私達の見守る目の前でスーッと息を止めてしまった母に慌てふためき、主治医に連絡すると同時に、救急車の手配をした。

呼吸がとまり血圧が下がり、心臓の動きもほぼ止まってしまった九十五歳の高齢の母を隊員の人達は交代で心臓マッサージを繰り返した。そして臨終を告げられる間際まで見届け、自分たちの力が及ばなかったと言わんばかりに深々とお辞儀される姿に、仕事を越えた人間性を見せて頂いた思いを抱いた。

それが母の乗った最後の救急車となった。しかし私はどこかで、また息をふき返した母と一緒に帰るつもりだったらしく、携帯電話を忘れながら、長い夜になる覚悟で、文庫本とメガネをカバンに入れていたのである。

街で救急車を見かけたり、サイレンが聞こえてくると母を思い出し、同時に救急車と隊員の人達への感謝を新たにするのである。

## ワン公物語

蓮のつぶやき



山崎蓮(慎子代筆)

私は「れん」六月二十二日で十二才になった。バグ犬。人間でいうと還暦程ということらしい。

近頃めっきり年を感じる。目はみえにくく、目ヤニもたまりやすい。耳は聴こえが悪くなつて耳だれ状態。毎晩母さんが手入れをしてくれる。それに、犬の最大の特徴である嗅覚さえ大分あやしい。

そうそう、その上つい先日、後の左足にイヤーな痛みを感じて歩くのが辛くなつてしまった。私はすぐに動物病院の先生の所に連れて行かれた。

小さい頃は先生の名前を聞いただけで、私はすっかり嬉しくなり、早く連れて行ってと、はしゃいだのだけれど、段々訳が分かつてくると、あのドアを開けた空間、いろんなワン公やニャン公、時としてウサギなんかがいる所が、すっかり苦手になつてしまったのだ。待合室で私は母さんの膝の上でずーっとふるえ続けている。

先生は足の様子を診て、それからレントゲンを見て「石灰がたまってますネ」と言っている。母さんは「人間と同じなんですネ」とやれやれと言った顔。

なにしろ私はこの十二年、ずっとお医者さ

んにかかりっぱなしで、いろんな病名を頂いた。避妊手術をはじめとして、手術と名のつくものを何度やったのだろう。その度お泊りをする羽目になり、先生即ち怖い所という図式が出来上がってしまったのだ。

そういえばお婆ちゃんがよく言っていた。「慎子さん(母さんのこと)あんたはよく名前をついた病気をするけど、その割には軽く済んでいるよねえ。良い塩梅!」

母さんと言つてもワン公の私を産んだ訳ではないから、体質が似るなんてことは勿論ないのだけれど、どうやら私は母さんに似たらしい♡

それにひきかえ妹の「はな」ときたら、いつでも元気!それもとびっきり元気!それにあの子は天真爛漫で他人の迷惑なんてものを全く気にしない。羨ましい程、甘え上手。

「蓮はシャイだからね」ってよく言われるけど、私は人見知りで損してるナと思う。だってよく分からない人に、どう接して良いか分からないし、父さんや母さんにしても「日々新た」っていう感じであつて、翌朝慣れる迄何となくきまりが悪いようなー!そんな感じ。

ところが「はな」ってば、いつでも誰にでもスリスリして巧みに甘えるのだ。よく見ていると甘え方のランクが微妙にあるのだ。でも、今更この性格は変えられないし、母さん達はその辺りのことをよく分かつてくれ

ているようだから。

そういえば、ある昼下がりに私は、父さんと母さんの会話を聞いてしまったのだ。(成る程悪口は不思議によく聞こえるものなのね)

「蓮は、随分年をとってしまったナ」

「今日なんて夕食時一時間以上ずっと吠え続けてうるさいつたらなかつたんだよ」

「あいつ、近頃そうなんだよな。少し呆けてきたのかもな」

「そうかも知れない。寂しいネ」

私って認知症なワケ?と私は些か不愉快かつ腑に落ちなかつた。私が吠えたのは、おなか为空いたからご飯を下さいって伝えただけなのに。それにあの時は夕暮れが少し寂しかったんだ。

そんな時も要領の良い「はな」の奴は、はるかに喰いしん坊のくせに、私が吠えているものだから、催促は姉さんにお任せね、なんて、素知らぬ顔で良い子ぶつてさ。

呆けたって言うけれど、じゃあ母さん達は大丈夫なの?いつだったか夕飯を忘れてたのは誰?お水を換えようねって、朝持って行った水入れを、それっきりお昼まで忘れていたのは誰だっけ。

そんなこんなでいやはや、全く年はとりたくないヨと思うのだけれど、我々犬族は人間の五倍程の早さで年とってしまうのだ。ま、いいか。

(以下 次号)